

静かな祈りが語るもの

一宮市立丹陽中学校

三年

伊藤

柚香

「野良仕事

すみし一時

戦地をば

偲び

てしばし 黙祷捧ぐ

これは私の曾祖母が詠んだ短歌だ。大正、

昭和、平成、そして令和という四つの時代を

生き抜いた曾祖母は三年前の夏、百歳で天国

へと旅立った。葬儀では曾祖母の作った短歌

集が参列者に配られた。その中にあった一首

だ。

この短歌には戦争を経験した曾祖母の思い

が詰まっている。野良仕事を終えたわずかな

時間、遠い戦地に思いを馳せ、静かに手を合

わせる。そのような一時が当たり前のように

あったのだと私は初めて知った。

私たちの世代にとって、戦争は歴史という

過去の記録の一ページであり、非現実的に感

じられる。だが、曾祖母のように実際に戦争

を経験した人はまだ身の回りに生きているの

だ。その人々が私たち若い世代に伝えようと

辛い戦争経験を話してくれている。そして曾祖母のように戦争が終わった現代でも祈りを捧げる心を忘れずに思いを繋げていることに私は胸を打たれた。

私が幼かった頃、いつも明るく話しかけてくれた曾祖母は戦争のことになるとあまり話したがりなかつた。しかし、その静けさの中にこそ本当の苦しさや悲しさがあつたのだと思う。もしかしたら、曾孫である私にはこんな悲しい事を知る必要のない人生を送って欲

しいと願っていたのかもしれない。

曾祖母は語らない姿から戦争の怖さを教えてくれた。しかし、戦争経験者はいずれいなくなる。その時に戦争の悲惨さや平和の大切さが実感を伴って伝わらなくなるかもしれない。それはとても危ういことだ。

今、私たちはとても恵まれた時代を生きている。空襲の心配もなく、家族と食卓を囲み、友と語り、笑い合える毎日がある。それは決して「あたりまえ」のことではない。曾祖母

たちがくぐり抜けた苦しみの先にある「奇跡」  
なのだ。その「奇跡」こそが私たちが守るベ  
き「平和」なのではないだろうか。

今年の夏、私は曾祖母の写真に手を合わせ、  
そっと口に出して読んでみた。

「野良仕事 すみし一時 戦地をば 偲びて  
しばし 黙禱捧ぐ」。

静かな部屋の中で、曾祖母の思いがゆっく  
りと心に染み込んでいくような気がした。

曾祖母が生き抜いた百年が幕を閉じ、私た

ちの新たな百年が始まっている。一方で世界  
では今もなお、戦争が繰り返されている。

私は心から願う。どうか、曾祖母の短歌の  
ような黙禱が必要のない世界が訪れますよう  
にと。そして、これからの世界を築いていく

一員として曾祖母の思いが込められた短歌を  
心に刻み、平和の尊さを忘れず、大切に守っ  
ていける人になりたいと思う。私たちの次の

世代にもこの短歌と共に平和に込められた深  
い思いをしっかりと伝えていきたい。